

三. 一一東日本大震災を体験して

桑原， 滋郎

元文化庁文化財保護部記念物課埋蔵文化財部門：文化財調査官

<https://doi.org/10.15017/1515672>

出版情報：歴史を歩く時代を歩く：服部英雄退職記念誌：とことん服部英雄，pp.261-264，2015-03-31．九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室

バージョン：

権利関係：



三. 一一東日本大震災を体験して

桑原 滋郎

一 多賀城跡の調査と貞観大地震・津波被害

1. 多賀城跡

奈良平安時代、政府は全国を都道府県に相当する国に分け治めた。東北地方は陸奥・出羽二国、陸奥は福島・宮城、出羽は山形・秋田の一部である。その北秋田北半・岩手・青森は支配が及ばず、「蝦夷」の住む地とされ、内国化が課題だった。多賀城は東北地方に置かれた巨大な「行政施設」で「国府多賀城」とも言われるが、一般の「国府」と比べ大規模で構造も異なり、役割にも差異がある。地域は九州に飛ぶが、大宰府は九州九国と壱岐・対馬二島を管轄し、兼ねて外寇を防ぎ外交の事を掌る役所で「遠の朝廷」と称された。一方多賀城は陸奥・出羽二国を管轄し蝦夷政策・戦闘にもかかわり、「外寇を防ぐ事と外交」も掌り、他地域の国府とは明らかに違う。多賀城・大宰府の共通点を単純に言う「広域支配と外寇を防ぐ・外交」であろう。「西の大宰府東の多賀城」と並び称される所以である。

多賀城に関し詳述するのは本文の趣旨でないが、筆者は長く多賀城跡の調査研究に当たったので、先ずこの度の巨大地震と多賀城跡の調査所見との関わりに触れたい。継続的調査は一九六九年「宮城県多賀城跡調査研究所」の発足後である。八一一世紀前半に継続した遺跡理解のため、研究所は以下の遺構期を設定した。

I期：創建期、八世紀前葉 七二〇年代頃から

II期：八世紀半ばの七六〇年頃から、宝亀一一（七八〇）年伊治公告麻呂

乱による放火で焼失崩壊

2. 貞観一一年の大地震

III期：II期の復興、貞観一一（八六九）年の大地震で壊滅的な被害
IV期：III期被災後の復興

三・一一以後注目されたのが、III期終末とIV期開始の指標とした貞観一一年大地震である。『日本三大実録』に状況が記され、被害の甚大さと事態の恐怖が伝わる。この地震専門家はM八・四以上と推定。夜間に起き、立つていけないほどの激しい揺れで、家屋は倒壊し、地割れが生じ死者が出た。多賀城も被害を受け、城郭・倉庫・門・櫓・築地が崩壊した。直後に津波が襲い海水は城下に到り、原野も道路も分からず一面海と化したとあり、溺死者は一〇〇〇人程という。

筆者はこの貞観大地震を知っていた。顧みて調査ではIII期被害状況を検出・検討するよりは、IV期復興工事の究明により強い関心が有った。III期崩壊後にIV期工事が重なるので止むを得ない面もあるが、被災の状況を子細に検証する視点に欠けていた。さらに『日本三大実録』が記す被害は多賀城近辺に限られると考えてきた。しかし近年被害範囲は我々の見方をはるかに超えた事が判明しているようだが、残念なことに学界の常識ではなかった。筆者は、三・一一大地震後の大津波により家屋・家財流失の被害を受けた。多賀城跡を長く発掘調査した考古学研究者として、過去の地震・津波を知りながら実態に迫ることについて怠惰であったと強く反省する。我々が地震・津波の痕跡を究明し危険性を強調していたら、今次の被害は軽減できたはずと思い、考古学失格者と言われても仕方ない。

3. 終の棲家と被災

筆者は定年退職後、宮城県南部の亘理郡山元町に移り住み、荒地一反歩を開墾し畑を楽しむ、弓道に精進し、考古学を続けたいと思っていた。そこは海岸から数百m入った海拔二mの地で、防潮堤の背後に二、三〇〇m幅の防風林があった。防潮堤に立つと、緩く大きくカーブする海岸が続く、北に仙台港が南は福島相馬港を遠望できた。将来想定される東北大地震はともかく、津波は心配ないと言われており、呑気に構えほぼ一〇年間平穏に過ごした。

ところで筆者は、特別名勝「松島」の現状変更に関わったことがある。白砂青松で名高い東松島町野蒜海岸の防潮堤工事で建設省は高さ八mを主張、「より低く」と抵抗したが「津波防災工事、太平洋沿岸は一律この高さ、これで津波の心配はなし」と迫られ妥協した記憶がある。山元町でも防潮堤は国策なのか確かに八mの高さ、さらには町発行のハザードマップを見ると「河口に迫った津波が溢れ出しても、膝下に海水が及ぶ程度の地域」の中に我が家はあった。

大地震発生時、経験の無い激しい揺れが数度、『日本三大実録』の「伏して起つ能わず」程でないにしろ、例えるなら暴れ馬の背に辛うじて立っているような心地で、床を曲面に感じた。しかし後に襲う津波は念頭に無く、避難する気持ちもおきなかった。しばらくして散乱する書物・音楽ソフト・粉々の食器をみて「これはただ事ではない」と徐々に恐怖が募り、次男に「役場にゴー！」と大声で呼びかけ、別々の車が出た。県道まで二〇〇m足らずの道には、マシホールが浮き上がり、私は辛うじて通り抜けたが、次男は通行不能。途中警察官に行きあったが、彼は笑顔で「大丈夫？」と問いかけるのみで、その後の津波には気付いてない風だった。県道の店先では数人の老人が談笑していた。うかつにも筆者は指定避難所を知らず、思いのまま数キロ西の国道六号を越えた役場に避難した。逃げ遅れた次男と再会し、日暮時、役場から東太平洋側を望むと、異様な光景が展開していた。防風林は消え失せ、前面を白く砕きながら、一km近くまで迫る「どす黒い巨大な動き」を目の当たりにした。海岸線は識別出来ず、先ほど急ぎ通った農道も田も見えず、県道

沿いの集落は皆無。この頃我が家は津波に攫われたと思うが、その実感はなく、目前で現実起こっている事態を理解できかねた。

二 被災後の事

1. 数々の支援

明くる朝、海水の引ききらぬ荒涼たる破壊現場を遠望したが、動揺することもなく淡々とした心境。「こんなことが現実起きた」という程度の感慨。立ち入り禁止解除を待ち二四日現地確認。土台を残す数々のみで家屋家財は一切なし、丹精した耕作土は綺麗さっぱり洗い流され赤土が広がっていた。この時漸く被災を現実として受け止めた。「無我夢中の思考停止期間」を経て我に返ると「住むに家無しの現実」にほとほと困惑。三月末、聞いた当座耳を疑ったが、家内の同級生から「北秋田市の実家を提供する、生活用具全て揃っているから歯ブラシだけで」という話を頂き、四月上旬仙台を離れた。豪壮なお宅で半年、秋田の方々の温かさに触れながら暮し、心身の安定を得た。しかし当地は名にし負う豪雪地帯、老人には越冬は無理とのこと、思い悩むうち、家内の別の同級生から「和歌山市の空き家を提供する、雪の前に越したら」との話を頂き、一〇月東北の人間が南国紀州の住人になった。二度の奇跡的な好意にすがって、「住むに困らぬ」生活ができたことは、誠に有難い。衣食に付いては、衣類は「着たきり雀」だが、食は絶えることない支援物資により飢えを知らず。この間知人・友人・先輩そして親族からの物心両面の援助があり、それなしに暮らす事は出来なかったと思う。言い難いことだが、感謝する反面、「こんなにして頂いて誠に申し訳ない、迷惑をかけている」といった、負い目も感じてしまう。この項のタイトルを数々の支援としたものの、全てを書くことはできない。最後に中でも忘れられない二つを記して、この項を終えたい。

筆者は中学二年二学期に札幌から旭川近郊に転校、一年強在学し卒業。既に

五五年を経たというのに、被災直後同級生五〇数名から多大のカンパがあった。短期間在学の「他所者」を覚えて居てくれた友情・芳志に感涙した。今一つは、大宇弓道部先輩の事である。弓道の奥義を窮め最高位の範士八段、新潟県弓道連盟会長の方。震災時、先輩は末期の癌、ペインクリニックで闘病中だった。ベッドでしきりに私の安否を気にかけてられ、数日後に奥様から「桑原無事」を聞くと、声を出して泣いて喜んで下さり、訳を知らぬ同室人が誤解して「痛くて泣く男があるか、皆堪えている」と窘めたこと、後日奥様から伺った。この様に物心両面にわたる支援を受けたこと、感謝するのみであるが、同時に反省点も多い。先ず自助努力の欠如。また顧みてこれまで他者にこの度受けたような温かさで接したか、加えて「無事を泣いて喜んで頂く」程の価値が私自身にあるのか等々、皆甚だ心許ない。肝に銘じ余生を過ごさねばと痛感する。

2. 貧弱な行政の対応

数えきれない私的な援助を受け、大きな不安もなく生活できた反面、三、一一被災に対する政府・行政の対応は、余りにも貧弱だ。マスコミが報じる原発被害対応で、全体が凡そ分かるだろうが、放射能汚染地域以外の復興策と生活再建支援も不十分だ。総理大臣は「国民の生命財産は守る」と声高だが、その実感は皆無。以下金銭の絡む話もあり不愉快かも知れないが、身の回りの実態を記しておきたい。被災直後「生活再建支援金最高三〇〇万円」として、家屋全壊被害者に内一〇〇万円が支給された。残余二〇〇万円は家屋を購入するか建築した時にという。全壊家屋は膨大だろうが、状況は区々で、流失・焼失・倒壊、或は一見旧状を止めたものも含む。それら全て同一扱いにするのは如何なものか。流失・焼失は家屋生活用具一切を失い、完全にゼロからの再出発で、多くの困難を伴うのは自明だ。「生活再建支援」と言うからには、被害の状況に応じた区分を設けるべきだ。これでは途方に暮れる者も多いと思う。また仮設住宅を視察したあるアメリカ人が「人間のハウスではない」と評したと聞くが、狭いうえに質が悪い。復興住宅建設は

遅々として進まず、なお八万余人が二〇一五年を仮設で迎えようとしている。さらに言うと、公的支援を受ける時に「世帯の縛り」が窮屈だ。分かり難いとも思うから、筆者の経験を述べると、山元町の被災者には農家の方もいて、大きな家に数世代が同居する例も多い。家屋流失の場合同居全員が一世帯とカウントされ、「仮設住宅一戸、道具類一セット」が宛がわれる仕組み。狭い仮設に全員は無理なので、別々に住んでも、三、一一現在の世帯単位だから、それ以上の支援は望めない。筆者の場合、和歌山県海南市で夫婦二人一世帯、次男は仙台市で单身一世帯、実態は二世帯に分解。次男が「見做し仮設」に住むので一世帯一件の原則が適用され、海南市での借家賃補助は対象外だ。また私たちは転居した場合、二週間以内に住民票を移す義務があると思ってきたが、今のこの制度が怪しい。次男が「仙台市に住民票を移す」と役場に言っていると「人口が減るからこのまま」と言われたそう。諄いようだが、国民健康保険医療費補助について少し触れよう。被災後医療費が免除された。しかしこの判断自治体独自で行うとされ、昨年から海南市は免除を中止歳をとると医者にかかる機会が増えこそすれ減ることはない。健康保険は国の制度なのに、自治体独自の判断に任せ、扱いに差異を生じさせるのは不平等。「貧すれば鈍す」ではないが、現在ルーズな住民票を元に戻したくなる。因みに山元町は医療費免除のままと聞く。

震災直後、私の住んだ地を含む津波被害地を、宮城県と山元町は居住禁止区域に指定し、将来防災緑地ゾーンとする構想と聞いた。これもやむなしと同意したが、住宅地としての価値の大幅な低下を招く措置に補償は無かった。私の土地は昨年「代替地取得の一助に」と買収された。インフラの復旧もない居住禁止区域の評価額は知れたもの、「適正な鑑定評価により買い取る」と町は言うが、売り手と買い手の交渉もなく事は済んだ。私の印象では震災前の半額程度だった。多くの国民・市民他からの義援金を数回、県・町経由で頂き、大いに力づけられが、何度目かの義援金が振り込まれた直後「間違えたので、返金せよ」の通知が有った。立腹し、し

ばらく放置すると「返金しないと貴殿の債務として法的措置を講じる」と脅迫紛いの督促が来た。

3. 現在の心境

被災後最大の痛手では、物質的喪失はともかく、記録類の消失により、「これまでの時間を全て失った」と感じたことだ。三・一一以後どのような精神状態で過ごしたか、自問するとまだ総括できていない。全てを清く諦めると心に決め、三・一一以前を「思い出す・言う」は「過ぎたこと・愚痴」として封印してきた。しかしこれは間違っていたことに近頃気づいた。「思い出しても、言っても良い」、そう決めた心が軽くなった。また我が身に起きた「喪失の絶対値」が確認出来ていないことにも事実だ。「命あつての物種」と激励する人がいると、「死ぬよりはまし」と感じる。今住む家に不満を抱いても、「仮設よりまだいい」と思う。「慣れぬ南国に住むのは暑くて辛い、友人が遠い」と思うと「赤道直下の外国よりまし」と言う風に日常のあらゆる面で不満や違和感を抱いても、全て「**よりはまし」と相対化して心を紛らしてきた。総括など到底無理で、このような気持ちの動きが今後長く続くのではなからうか。

「命あつての物種」に戻るが、先日紙上で親族を失い辛うじて生き残った方の思いとして時には「罪悪感に苛まれる」との記事を目にした。有得ない感情と思うかも知れぬが、被災者として共感を覚える。励ましの意味のこの言葉さえ、無念の死者に対する「後ろめたさ」を感じさせる響きがある。美談は好むが、不平・不満は聞きたくないのが世の風潮であろう。しかし複雑な思いの丈を全て吐き出さないと、生活再建の気力も湧いてこないと思う。

こうした中、趣味の弓道は用具全てを頂き継続、音楽鑑賞も細々復活、畑も東北とは異なる季節感に戸惑いながら楽しんでいる。しかしどうした訳か、自分の考古学は未だに手につかない。最早考古学失格者なのかもしれない。最後に現在の心境を一言で表すならば「不運だったが不幸ではない」に尽きる。

終わりに、服部英雄教授の定年記念文集に思いがけず執筆の機会を与えられた。光栄なことと駄文を草したが、場違いの感が拭えない。

しかし未曾有の大震災を経験した一考古学研究者として、聊かなりとも感慨を残しておきたいと念じていたのは確かで、それが端無くも実現しとても嬉しく思う。

服部教授とは約三〇年前文化庁文化財保護部記念物課で部門は史跡・埋蔵文化財と違うものの、三年間背中合わせに座席があり、過ごした仲である。ともかく、紅顔の服部君がその後大活躍され、無事定年をお迎えのことを慶び、ますますのご活躍を祈念したい。

(元文化庁文化財保護部記念物課埋蔵文化財部門文化財調査官)